

高浜虛子・長塚節・伊藤左千夫集





© 1968

日本文学全集17
高浜虚子
長塚節集
伊藤左千夫

昭和四十三年九月十二日 初版
昭和四十五年九月二十日 四版

著者
高浜虚子
長塚節
伊藤左千夫

発行者
陶山 巖

印刷者
奈良直一

発行所 株式会社 集英社

〒100 東京都千代田区神田一ツ橋三ノ五ノ二
電話 東京(265)六三二 振替 東京二六五

印刷 株式会社 常磐印刷所

落丁、乱丁本はお取りかえします
検印 廃止

Printed in Japan

日本文学全集

高 浜 虚 子
長 塚 節 集
伊 藤 左 千 夫

康英社



編集委員（五十音順）

伊藤 整

井上 靖

中野 好夫

丹羽 文雄

平野 謙

装

幀 伊藤 憲治

繪 三芳 悌吉

挿

三芳 悌吉

目次

高浜虚子集

風流懺法

斑鳩物語

虹

愛居

音楽は尚お続きおり

小説は尚お続きおり

寿福寺

長塚 節集

土

七

三

四

四〇

四

三

五

八

伊藤左千夫集

野菊の墓

三七

隣の嫁

三七

注解

四〇五

作家と作品

山本健吉

四〇九

年表

四三九

高浜虚子集

風流懺法

横河

今朝阪東君が^{けきばんとうくん}出立^{しゅつたつ}するのを送られて和尚サンもあまり行^いけぬ口に一杯過^{くわ}ごされた。阪東君が出立したあとで和尚サンはしばらく火燵^{ひつぐら}に頸^{あど}を乗せておられたが、そのうち、「ちよっと一睡^{ひとね}りしますわ」ところりと横になられた。

叡山^{えいざん}の横河^{よかわ}中堂^{ちゅうどう}の政所^{せいしよ}に余^よはもう四五日滞在しておる。たまたま京都に來た阪東君は昨日余を尋ねて登山して昨夜は和尚サンと三人枕を並べて寝たが、今朝東塔西塔を一見して無動寺^{むどうじ}から白川口^{しらかわぐち}に下って京に帰るはずで出立した。余も明日は下山して阪東君と一兩日京都で同

遊^{あそ}ぶすることに約束したのである。

横河は叡山の三塔のうちでも一番奥まっっているので淋しいこともまた格別だ。二三町離れた処にある大師堂^{だいいしどう}の方には日によると参詣人^{さんぎにん}もぼつぼつあるが、中堂の方は年中一人の参拝者もないといつてよい。大きな建物が杉を圧して立つておる。四方の扉は皆締めきつてあるのでは真暗^{まくら}だ。ただ正面に一尺角ばかりの穴が開いておるのでそこから中を覗くと、その真暗な中に常灯^{じょうとう}明が淋しくともつておる。政所はその中堂を十間ばかり離れた処に別棟^{べつてい}になつて建つておる。そこに和尚サンが下男も置かずに一人で自炊しておられる。余も自炊の手伝いをしながら四五日滞在しておるのである。

和尚サンは布団^{ふだん}から丸い頭だけ出して海老^{えび}のようになつて寝ておられる。もうぐうぐうと眠られた様子だ。この和尚サンのお勤めは毎日一時間半ずつ中堂で看經^{かんきやう}をせられることだ。そのほかに何も用事はない。その看經も時は一定していない。朝でもよい昼でもよい晩でもよい。要するに一時間半さえ勤められればよいのだ。だから眠い時は朝からでも眠られる。淋しい境涯^{きやうがい}だがまた氣楽な境涯だ。

余は和尚サンの部屋を出て玄関の並びの自分の部屋に戻る。机に凭れてじっと耳をすます。静かだ。今は嵐の音も聞こえぬ、鳥の声もせぬ。何だか静かさが極点まで達してもの凄（ぞと）いような気もする。ほどなくポツリポツリと雨垂（あまだ）れらしい音が聞こえる。驚いて障子を開けてみる。といつの間にか雨が降っている。軒の小坊主が光っては落ち光っては落ちてゐる。寒い。障子をたてる。

それから二時間ほど余は用事をしていて何事も忘れていた。ふと気がつくとき和尚サンはまだ寝ておられる。雨はまだ静かに降っている。台所に物音が聞こえるようだ。不思議に思つて行つてみると、暗い台所に白い衣を着た小僧サンが一人おる。流しの前に立つて何物か洗っているようだ。よく見ると今朝よごれたままの茶碗や皿を置いておいたのを洗つてくれているようだ。小僧サンは余の方を向いてニコリ笑つたが辞儀もしない。

「君はどこの小僧サン」
と余が聞くと、

「大師堂」

と大きな声で答えて、

「どうして昨日湯に入りに来なかったの」

と友だちのような口をきく。

「風邪をひいていたからサ」

「せっかく僕がわかつてやったのにナア」

「君がわかつてくれたのか、それはすまなかった。この次ははいるヨ」

「僕はあすうちへ帰るのだヨ」

「君のうちはどこ」

「僕のうちは東京、だけれど京都に伯母サンがいるの、あすは伯母サンのうちへ行くの」

「伯母サンのうちは京都のどこ」

「祇園町」

祇園町とはちよつと意外であつた。

「祇園町というのはどこ」

と試（こころみ）に聞いてみる。

「祇園町を知らないのか。ばかだナア」

と小僧サンははなはだ軽蔑（けいべつ）した調子で、

「君はいつまでここにゐるの」

「僕か、僕も明日京都へ行くつもりなの。いいヨここに拭巾（ふきいん）があるから拭くのは僕が拭くヨ」

「まア貸したまえ僕が拭いてやらア。明日京都へ行くの」

か。この次にはいるナンテ、今度いつ湯がわくと思つてゐるのだ。間抜けだなア、五日目五日目でなけりゃわかないのだヨ」

機鋒鋭くして当るべからずだ。

「そうか、それじゃ大師堂のお湯にはもうはいれないね。困ったナア」

「困らなくたっていいや。アンナ汚ない湯にはいらなくたって京都にいくらでもいい湯があらア。君、湯は東京より京都の方がいいヨ。京極にいい湯があるぜ、蒸気でわかすのだヨ」

「君はいつ小僧サンになったんだい」

「二月」

「二月って今年の二月かい」

「ウン」

「東京にはいつまでいたの」

「去年まで。尋常を卒業するとコチラへ来たの。君、桜田小学校知ってるかい。僕あそこに行つてたんだヨ。山崎や戒田は今年高等二年になるんだって威張つてらア。こないだ手紙をよこしたヨ。字ナンカやつぱり下手だア。ネー君、いくら威張つたつて字の下手なのはみっと

もないや」

小僧サンは茶碗や皿を戸棚に片づけて台所を掃除して、ズンズン余の部屋にはいつてくる。

「君勉強しているのかい。君全体何しに来たの。遊びに来たのかい。……ばかだナア、コンナもの書いてらア。全体何の画だい。下手だナア。僕の方がよっぽどうまいや」

と火鉢の向うに坐つて机の上に置いておいたノートブックを開けて痛罵を試みはじめる。

暗い台所から明るい部屋に来てみると小僧サンはなかなか美少年だ。年は十二三で、色白で、目が大きくつて、口元が締まつている。

「よう君、何を書いたんだい。密壇の画だつて。こんな密壇があるものか。ばかだナア。礼盤がこんなに小さくて、脇机がこんなに大きくつてどうするんだい」

元来画心のない余が文字代りに急いで書き取つた図をさんざんに攻撃する。

「『朝念観世音、暮念観世音、念々從心起、念々不離心』……ヤーイ十句観世音経なぞ書いてらア、間抜けだナア。……『こんな処へ落ちたら死にますエ』……『強儀なこ

としたもんだっせ』……こんなこと君書いてるのかい。

こんなこと書いてどうするんだい。本当にばかだナア」と余の顔を見る。大きな目に冷笑の光を漲らせておる。

「全体君は何だい。何を仕事にしているんだい。妙なことを書き留めとくんだナア」

と独り言のようにいいながら、紙の間に挿んであった鉛筆を取って余の顔を写生し始める。ちよつと空目を使つては書きちよつと空目を使つては書く。

「だめだナア、君は動くからだめだ。この和尚サンを書いてみようか。この和尚サンは大きな頭をしているだろう。こんな頭だぜ。それからねえ、耳がこんなに……まるで蝙蝠のようだぜ。僕は和尚サンと向き合つてるといつでも頭と耳ばかり見てやるのだ。君、君」

とだんだん声を張り上げてきて、

「それからねえ君、和尚サンの耳は動くぜ。不思議だぜ。どうかしたはずみにぴこぴこと猫のように動くんだもの、僕ア不思議だと思つちやつた」

和尚サンは「ウーン」と布団の上に白い片脰を突きだして片々の手で擦つておられる。

「ヨセヨセ、ソナナ人の悪口をいうものじゃない。君は

腕白だナア」

と余は最中を三つやる。

「ありがとう」

とさつそく一つ頬ばる。余の飲みさしておいた茶碗の上に冷たい茶を注ぎ足して飲む。

和尚サンは、

「アアよく寝たこつちゃ」

と欠びをしながら起き上られる。

「一念、来ていたか。お客様は邪魔をしてはいかぬぞ」

「邪魔なんかするものですか」

と手帳の上に和尚サンの欠びの図を書いて顔じゆう口にする。そうしてその口から棒をひいて「一念キテイタカ、お客サマノジャマシテハイカヌゾ」と書いて、また耳から棒を引いて「コノ耳ウゴク」と書く。余は覺えず噴きだす。一念は知らぬ顔をして、

「宝珠院サンは今日午から下山るつもりだから、そういつてくれといいましたヨ」

とちよつと和尚サンの方を見てすぐ今度は眼鏡を掛けた和尚サンの似顔を描く。見るとなるほど鼈甲縁の大きな眼鏡を掛けて和尚サンは何か書つけを見ておられる。

「きようは十二日だな」

と迂遠なことをいわれる。

「十四日ですよ」

と余は答える。

「十四日か。もうそうなるかな。あなたが来たのがおとと日であつたかな」

余はもう五日間滞在しておる、それを一月ほどにも覚えるのに和尚サンはのんきなことをいわれる。

「あなた落の臺好きか。納豆はどうかかな」

「納豆は閉口ですが、落の臺はけっこうです」

「それではあすお帰りまでに落の臺の田楽をひとつ拵えてあげよう。きようは雨だから困るが、兜率谷の方に行くと落の臺がたくさんある。あすの朝天気になったら一念ひとつ取ってきてんか」

一念は聞かぬ風をして「明治二十八年十月二日生一念」と鉛筆を圧えつけて四角な字をノートに書いておる。

「落の臺の田楽といひますのは」

「落の臺を串にさして味噌をつけて焼くのじゃ。よほど香りのええものじゃ。落の臺が嫌いではなけりやキツと賞

翫おしるじゃある」

「そりやけっこうでしょう。兜率谷という恵心廟のきの方ですね。それじゃ私が取ってきましよう」

余はここに来てからまったく精進料理ばかりを食っておる。それも煮豆に焼湯葉に味噌が主で、豆腐汁やほうれん草のしたし物などは坂本からの好便に豆腐やほうれん草が届かなけりや食うことができん。そんな中に落の臺の田楽は聞いただけでも珍味だ。もうその香が室内に満ちているような気がする。

一念は余が机の上をかき探していたが、

「これ、君何だい」

と安全剃刀に目を留める。

「剃刀だよ」

「剃刀だって。ばかだナア。こんな剃刀で君は髯を剃るの。うまく剃れるかい」

としきりにひねくって見ている。

「一念、御邪魔をせんようにして、少し台所のことでも手伝ってくれよ」

「一念君は最前もう大変働いてくれました。茶碗や皿をすっかり洗ってくれました」

「そうであつたか。それは御苦労であつた。ついでに気の毒だが、茶釜ちやがまに一杯お湯をわかしてくれまいか」

一念はだまつてまだ剃刀をいじっている。

「どうやって研ぐんだい」

「こうやるのサ」

と余はやってみせる。

「ばかだナア」

とふたたび受取つて、

「君いつ剃つたの。今剃つてみたまえな。よう、剃らないのかい。ばかだナア」

と感心する時も不平な時も「ばかだナア」という。

「一念、お湯をわかしてくれまいか」

と和尚サンはゆつくりとまたくりかえされる。

「君、和尚サンが何かいっておられるじゃないか」

「剃つてみないのかい。間抜けだナア」

と一念はいかにも残り惜しそうに剃刀を見返りながら台所に立つて行った。ほどなく茶釜の下を燻いぶし始めたらしい、松葉のばちばちという音が聞こえる。

「なかなか才はじけた小僧サンですね」

「どうもいたずらで困りものだ。その代りお経きやうもよく覚

える、役にも立つ、育てようによつたら立派なものになりますやろ。……大麥降るようだな。阪東サンはお困りじゃあろ。もう十一時か」

と和尚サンは火燵かこから出て背延せのびびをせられる。大きな頭が目についておかしい。一念は何をしているのかただ松葉のはねる音が聞こえるばかりだ。

和尚サンは火燵かこをのけられる。そのあとがすぐ炉ろになる。そこに鉄瓶てつびんをかけてそのへんの埃ぼこりを拾うては炉の中にくべられる。

「お茶を入りよう。仕事の切れ目ならお出でんか」

「ちようだいしましよう」

と炉の向う側に坐る。

「わしは冬でも膝枕ひざまくらをするので……きようはどういう具合であつたか頭がしびれたようだ」

と下にしていられた右側を掌てのひらで擦すられる。見ると枕の角の痕が赤く頬に残っておる。

「寝がえりもなさらず片側ばかり下にしていらしつたからでしよう」

「寝がえりというものは平生よだんからあまりしませぬて。戒律かいりつに頭北西面右脇臥くわいめんきやうがということがやかましくいうてあ

るが、頭北西面は間取りの都台などで厳密には行かぬにしても、僧はたいがい右脇臥ということだけは守っておる。ことに仰臥は非常に嫌うので、仰向けに寝ると淫心を起こすともいうし、淫を齧ぐものは仰臥するともいうし、かたがたそれはかならず避くべきことになっておる。その理由はともかく、出家が大の字になって寝るのはあまりみつともないものでな」

と和尚サンはきびしいの終りの一二滴を余の茶碗と御自分の茶碗とに等分に落とされる。鉄瓶の湯気が真直ぐに登って和尚サンの顔のあたりで消える。

「和尚サンおいくつです」

「わしかな、もうちようどじゃ」

「五十ですか」

「そうじゃ。もう来年ぐらいからは小僧か男を一人置かぬと、自炊が億劫じゃ」

「そうでしょうとも。一念サンは宝珠院サンの御秘蔵ですか」

「宝珠院は持てあましておるのじゃ。わしに預ってくれともいうとるのじゃが、わしの手にもあまりそうじゃて。ハハハハ」

と最中のこわれているのを掌に載せて丁寧にあたられる。炬の縁にこぼれたのを指尖でおさえて口へ持つて行かれる。

「和尚サン、お湯が沸きましたよ。サヨナラ」

と一念の声がする。

「そうか、それはお世話であった。もう午じや。茶漬なと食べて行かんか。……アア、そうおし。一念一念」

と延び上るようにして大きな声を出される。なるほど和尚サンの耳は少し動く。ノートに書いた一念の画が思いだされておかしい。しかし一念はもう裏口から帰ったものと見えて返辞がない。

一 力

仲居のお艶に、

「それが名高い赤前垂れかね」

と聞くと、お艶はちよつと気取って蠟燭の心を切つて、
「そうどす。これは一力ばかりに限ったことやおへんけど、こうやって帯に挟む具合がよそとは違うてますのや」

という。阪東君が、

「ちよつと立ってみせたまえ。長いのかい」

ときくと、お艶はだまって立って、帯に挟んであるのをはずしてみせる。大幅の緋の縮緬を二枚合わせた広いのが、チャンと並べた足を隠して幔幕のように畳の上に垂れる。広い座敷に林のように立っている蠟燭の光りがこの赤前垂れ一つに集まる。その時向うの銀紙で張った衝立の陰から今日四条の雑店で見えような舞妓が一人現われる。同時に衝立の中から、

「三千歳はんあげます」

という声が聞こえる。舞妓は余らの前に指を突いて、

「姉はん、今晚は」

とお艶に会釈する。厚化粧の頬に闇ができて、唇が玉虫のように光る。お艶の赤前垂れの赤いのがこの時もとのとおり帯の間に畳まれて、極彩色の京人形が一つ畳の上に乗っている。

「お前いくつ」

「十三どす」

「ほんまに可愛い児どすやろう。私ら毎日見えますけど、見るたんびに可愛て可愛てかないまへんわ」

とお艶は銀煙管に煙草をつめる。

「その帯は妙な結びようね」

「これどすか、こうやって、ここをこう取って、こつちやに折って、こう垂らしますのや」

と赤いハンケチを膝の上でたがねてみせる。白い指がそのハンケチにからまって美しい。

「何というのその名は」

「だらり」

「髻の名は」

「京風」

「櫛は」

「これどすか」

と白い手を前髪の後ろにやって、

「花櫛、これは前髪くり。あなた何書いといやすの」
と余のノートを覗きこむ。

「三千歳はん、今日虚空藏様へお詣りやしたか」

「ハー」

「何というてお拝みた」

「あほうどすさかいに智恵おくれやす、というて」
銀紙の衝立の陰からまた人形が一つ出る。

「松勇はんあげます」

「姉はん今晚は」

と三千歳に並んで坐って、

「今日お詣りやしたか」

と三千歳の手を取って自分の膝の上に置く。

「ハー」

「帰りしなにあとお向きやへなんだか」

「向かしまへなんだ」

と三千歳は麿えびの上を両手でおさえる。

「おもしろそうなお話ね」

と聞くと、

「虚空蔵様に詣って戻り道にあと向くと智慧かえします

てやわ。あの叶屋かろうやの染菊そめぎくはんな、つい忘れてあと向かは

って、帰らはってからあほうにならしたて。おおい

や」

とお艶がいう。

「いやらし」

と三千歳と松勇は同じように眉をよせて同じように背中の帯に手をやる。一つの糸で二つの人形がいっしょに動いたのかと思われる。ちりけ元もとから垂れた帯は松勇のが

ことに長く畳の上に流れている。

「その帯は何という結びよう」

とまた松勇に聞いてみる。

「これどすか、だらり」

「髻は」

「京風」

と同じことをいう。

銀紙の衝立つぎの陰から今度は人形が二つ出る。

「喜千福きちふくはんあげます」

「玉喜久たまきくはんあげます」

「姉はんおおきに」

「姉はんおおきに」

と二人並んで燭台しょくたいの向うに坐る。こちらの二人が鏡にうつたようによく似ている。

「二人の帯は」

とまた聞くと、

「これどすか、だらり」

と喜千福が玉喜久を見る。

「髻は」

「京風」